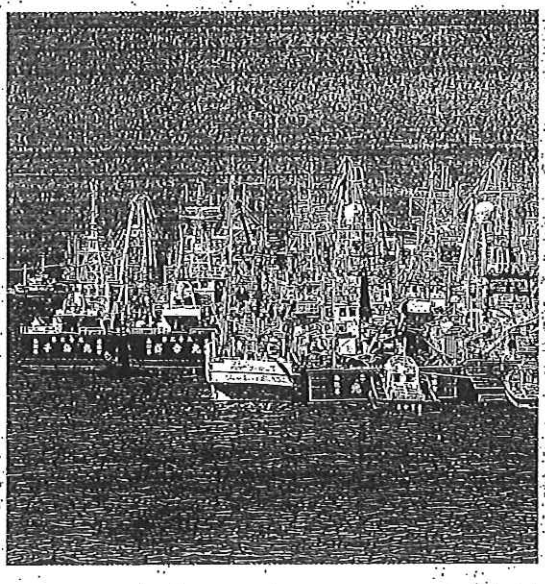
大楽毛物語▼⑥



鳥取新聞「山陰隔月日報」

鳥取県士族移住者は、第一次が明治十七年に入地して「鳥取村」を創始した。ついで十八年に第二次の移住があったことは前号、前々号でも書いた。本格的な士族の移住だったので鳥取県の地元で発行する「山陰隔月日報」では、移住者の募集、出航状況、釧路到着、現地の状況を逐次報道した。

地元鳥取からみた「士族移住」の観察記は、今日においても貴重な記録といえる。当時釧路の他に「根室県」への移住志願者も20家族終結していた。その他「函館県」にも志願する者がいたが十二名分の不足があるとのことで再度募集を呼びかけている。

明治十七年五月二十日の第一一七号では、横浜から共同運輸会社の汽船が出発したので到着するまでに加露港に集結するようにと。移住者には賜金が与えられ、本県庁から移住者惣代なる三名に参円、移住者惣代員三五戸にも金弐円五十銭賜わりたりと。

ひたすら出発を待つ人々

さて、いよいよ移住船「宿弥丸」が加露港にやって来た。出港風景は、見知らぬ地へ旅たつ不安の顔でいっぱいだ。今生の別れを哀しむ人々の哀惜の念が伝わってくる。

「元気でやれよ」「仲良くしてね」と岸壁の人。「ありがとう」「お金儲けて帰ってくるからな」といえば「早くだぞう」と元気なオーム返し。しかし中には「○○兵衛、借金はいつ返すんだ！」とか「逃げる気かお前！」と穏かならぬ罵声が。誰にも告げずこっそり移住者登録した食いつぶしもいたに違いない。借金を返すことができれば、釧路まで出向く必要なんかない人もいた。罵詈雑言にじっと耐えながらひたすら出港のドラの音を今か今かと待つ子持ちの夫婦もいた。

余命いくばくも期待できない老人もいれば、生まれて百日も経たない赤児を抱く母親の姿もありみんな家財道具も粗末な人たちだった。出発の気笛が鳴った。なおも「べらぼうめ」「老いぼれだまれ」などとののしりとある。「見て憐れなり」とある。

大丈夫なのかな釧路って

釧路に行くにはいいがどんなところで、一体全体食べていけるのかどうなのか。借金もあるし早く鳥取から逃げるに越したことはないが、「みんなが渡れば恐くない」の心理が働いたことは確かだ。

釧路の最良の地は大楽毛

受入れ地釧路の「適地」選定調査は、やけに遅く移住者到着直前である。適地調査はまず地勢、地質そして交通、運搬の難易度だが、その中でわが「大楽毛」が最良の土地と認定しているのは興味い。「釧路野ハ、地勢地質二士族移住適当ノ地ニ有之、就中「阿寒川西岸」「オタノシケ川トウロサンシユロツノ間」。

続いて「塘路村字シリトル」並びに「イワボッキ山岸」ノ四カ所ハ地味潤沢、開墾容易ニシテ、運搬亦便利ニ有之」とし、二年で成業が可能だと太鼓判をおしている。さらに「地面九十万坪、阿寒川沿岸ヨリオタノシケ川ヲ経テ村内ニ至る、道路凡ソ三十町、橋一カ所長サ七間」とある。

（つづく）

北海道新聞

購読お申し込みは
フリーダイヤル ヨムヨ・ドーシン
0120-464-104
または右記販売所へ

㈲丹葉新聞店
釧路市大楽毛5丁目8の1
TEL:57-8228